

ジエミイの冒険

片山広子



むかし、ファネットの田舎に、ジェミイ・フリールという青年が母と二人でくらししていた。後家ごけである母はむすこだけをたよりにしていた。むすこはその頼もしいうでで母のため一生けん命働らき、毎土曜日の夜になると、かせぎためた金を母の手にそっくり渡してじぶんは半ペニイのお小づかいをありがたくいただいているのだった。こんな孝行むすこはひろい世間にも二人とはいないと近所の人たちからほめられていたが、ほかにもジェミイのことをよく知っている人たちがいるのだった。それはかれが見たこともない、五月祭の前夜よみやか萬聖節の時ハロマスでなければ人間の眼には見られない人たち、つまり妖精たちである。フェアリー

ジェミイの家からすぐ近くに、くずれかけた古いしろがあつて、「小さい人たち」すなわち妖精フェアリーの住家だといわれていた。

毎年萬聖節の前夜になると、古い窓には明るく燈火がついて、しろの中をあそびまわる妖精たちの小さいすがたが道ゆくものにもよく見えて、パイプや笛の音も聞えてきた。それが妖精たちのえん会なのはみんなが知っていたけれどだれもその席にはいつて行く勇氣はなかつた。ジェミイは遠くから小さい人たちのすがたをながめ、美しい音楽をきいてしろの内部はどんなようすだろうと考えてみたりしたが、ある萬聖節の前夜、かれはぼうしを手にして母にいつた。

「母さん、ぼくはいい運をさがしに、おしろにいつてみます。」母はおどろいて、おしろにどんなこわいことがあるかもしれないととめたけれど、だいじょうぶ、すぐ帰つてきますといつてでていつた。

いも畑をつつきると、もうそこにしろが見えた。窓々には

あかあかと燈火がついて、夜の林の木々にまつわるかれ葉も黄ろく金いろに見えていた。木立のかげにたつてジェミイは妖精たちのえん会さわぎをきいていると、わらい声や歌の声がかれをさそいこむのだった。小人たちの一ばん大きいのも五つ位の子どもの大きさに、小さいみんなが笛や胡弓こきゅうの調子にあわせておどっている。おどっていないものは飲んだり食べたりしているのだった。

小人たちは新しいお客を見ると、みんながよんだ。「ようこそ、ジェミイ・フリール！ ようこそ、ようこそ！」このよう、うこそ、その声が伝わってしろじゅうのみんなが「ようこそ」といいあった。

時間がたつて、ジェミイはゆ快になっていると、主人がわの妖精がいった。「われわれは今夜ダブリンまで遠乗りして、

おじょうさんを一人ぬすんでこようと思うんだ。一しよにゆかないか、ジェミイ・フリール？」

「うん、ゆくよ。」

数頭の馬が入口にたっていて、その一つに乗ると、馬はすうつと空中にとび上り、妖精たちの一隊と一しよにもうすぐジェミイの母の家の上をとびこえて、高い山や低い山もどんどんとびこえ、深い湖もこえて、町々や村々の上をとんで行った。地上の人たちはたのしい萬聖節のお祝いにたき火で「くるみ」を焼いたり、林ごをたべたりしているのだった。アイランドの國じゆうをとびまわるのかとジェミイが思っていると、デリイの市にきた。お寺の高い塔の上をこえるとき、「ここがデリイだよ」と一人の妖精フェアリーがいうと、五十人もの小さい声が「デリイ、デリイ、デリイ！」とくりかえしてさけぶ

のだった。

とちゆうのどこの市にきてもジェミイはいちいちその名を教えられて、やっとのことダブリンにつくと、銀の鈴のような小さい声々が「ダブリン、ダブリン、ダブリン！」と教えてくれた。

妖精たちの目あての家はステイヴンスのおかのりっぱな住宅の一つだった。かれらが窓の近くで馬をおりると窓のなかのりっぱなベッドにねむっている美しい顔がジェミイにみえた。妖精たちはおじょうさんをだいて外につれだし、その代りに一本のぼうをベッドにおくと、それがおじょうさんのすがたに変わった。

一人の妖精がおじょうさんを自分の前にのせて少し行くと、またべつの妖精にわたし、ゆくとおりのとおり町々の名をよ

びながら馬を走らせる。だんだん自分の家の近くまできたことがわかるとジェミイはいった。

「みんなが代りばんこにおじょうさんを乗せているね、ぼくも、ちよつとでも乗せてあげたい。」

「よろしいとも、お前もおじょうさんをのせてあげな。」妖精たちがきげんよくジェミイにいうので、ジェミイは大事なおじょうさんをしっかりとかかえて、いきなり、母の家の入口にとびおりてしまった。

「ジェミイ・フリール、ジェミイ・フリール、こすいことをするな！」<sup>フエヤリー</sup>妖精たちは怒ってみんなが一しよにとびおりた。

ジェミイはしつかりおじょうさんをだいていた。ここまできるとみるみる妖精たち<sup>フエヤリー</sup>はいろんなすがたにおじょうさんを変えたので、ジェミイはいま何をだいているのか自分でも知ら



ない。一度は黒犬になって、かみつこうとした、つぎにはまっ赤な鉄のぼうになったが、すこしも熱くなかった。ジェミイが一生けん命におじょうさんをかかえていたので、妖精たちはあきらめて立ちさろうとしたとき、小人のなかの小さい女がさげんだ。

「ジェミイ・フリールはおじょうさんをとってしまっただけ、いいことはないよ。私は、おじょうさんをつんぼのおしにしてやる！」そういつてかの女は何かをじよおじょうさんにふりかけた。

妖精たちは失望してさっつてしまうと、ジェミイは家のかかけ金をがねはずしてはいった。

「まあ、ジェミイや、妖精たちはどうしたの？」母は心配したが、むすこはへいきだった。

「母さん、とても運がよかったよ。母さんの話相手にこんなきれいなおじょうさんをつれてきた。」

母はおどろいて「まあ、まあ！」というだけだった。ジェミイは今夜のできごとを話して、おじょうさんが妖精たちにつれて行かれて、まよい兒になつてはかわいいそうだから、助けてきたといった。つんぼのおしのおじょうさんはうすいねまきで寒そうにふるえながら火のそばによつていた。

「かわいそうに、おとなしいきれいなおじょうさんだね！　こんな貧ぼうな家でも、何かきせてあげるものはないかしら？」母はしばらく考えて、自分の寢部屋にいつて、日曜日の教会ゆきにきる茶いろの外とうをだした。それから別のひきだしから、白い靴下や、雪のようにまっ白いリンネルの上着と白いぼうしをだした。おむかえぎといって長い前から用意され

た死衣しようなのだが、母はおしげもなくそれをおじょうさんにきせると、おじょうさんはだまってきせられて、それからろのそばのこしかけにしずみこんで、両手で顔をかくしていた。

「あなたのようなりっぱなおじょうさんを、私たちが養ってゆけるかしら？」母は心配したが、ジェミイはその日から、お母さんとおじょうさんのためにむちゆうになって働いた。おじょうさんはそれから長いあいだ悲しそうにしていたが、だんだんジェミイの家の生活になれてくると、ふたの世話をしたりに、わとりのえをやったり、古い毛糸でソックスをあんたりするようになって、一年の月日がすぎた。また萬聖節の祭日がまわってくると、ジェミイはぼうしを持って母にいった。

「母さん、ぼくはいい運をさがしに、もう一度おしろに行つてきます。」

ジェミイは去年のとおり林ごの木立のかけにたつて、窓のなかの明るい燈火をながめ小人たちのさわぎをきいていると、中ではかれのうわさをして「去年はジェミイのやつがひどいことをしたね、きれいなおじょうさんをさらって行って」と一人がいつている。すると小人の女が「だから私がかえしをしてやったのよ。あのむすめはつんぼのおしで何もできない。私のこのコップの水を三てきだけ飲ませれば、すっかりなおるんだけど、ジェミイはそんなこと知らないんだ。」ジェミイは心がおどるようで、内にはいつて行くと、妖精たちは声をあわせて飲かんげいした。

「ジェミイ・フリールがきた！　ようこそ、ジェミイ、よくき

てくれた！」その歓げいの声がしずまると、小人の女がコップをだした。

「ジェミイ、私たちの健康を祝って、このコップから飲んでね。」

ジェミイはコップを取るがはやく入口をかけた。まるでむちゆうで、走って走って家にとびこむと、ろのそばにしろもちをついてしまった。きちがいのようにいも畑をかけてくるときコップの水がこぼれてしまったけれど、まだすこし残っていて、三滴の水を大いそぎでおじょうさんに飲ませてあげると、おじょうさんはすぐに口がきけて、まずジェミイのしんせつのお礼をいうことができた。

朝になっておじょうさんは紙とペンとインキをだしてもらって、ダブリンのお父さんに手紙を書いた。だが、その返事は

こなかった。何度も手紙をだしても返事がないのだった。

おじょうさんはダブリンまで一しよに行ってくれとジェミイにたのんだが、ジェミイはダブリンまで馬車をやとうお金がなかった。とうとう二人はダブリンまで歩くことにして、遠い道を歩いていった。

ステーヴンスおかのお父さんの家では取次の下ぼくができて「ここの家にはおじょうさんはありません。一人いらつしたので、去年なくなりしました」とこのおじょうさんを入内に入れようとしなかった。おじょうさんがお父さんかお母さんに会わせてくれとないてたのむので両親がでてきたけれど、

「うちのむすめはもう一年も前に死んでほうむられている。お前はかたりだろう」とどうしても受けいれてくれない。一

年前にほうむったむすめのことを考えると、どんなによくに  
ていても、かれらにはどうしても信じられないのだった。

「みんなが私をわすれたのね！　母さん、私のくびの『ほく  
ろ』を見てください。私がわかりませんか？」母はそういわ  
れてようやく自分のむすめだとわかったけれど、おかんに入  
れてほうむったむすめのことかどうにもふしぎに思われた。  
それでジェミイは去年の萬聖節の夜のぼう険から、おじよ  
うさんが三滴の水の力で救われた話もきかせた。

おじようさんはジェミイ母子おやこがどんなにしんせつにして  
くれたかも話したので、両親は、どうしてこのお礼ができるで  
しようと、心から感謝するのだった。ジェミイが帰ろうとす  
ると、おじようさんは一しよに行くといいだした。

「ジェミイは妖精フェアリーの手から私を救っていままで世話をしてく

れました。生きていてお父さんお母さんに会えたのもジェミイのおかげです。私は一しよに帰ります」

かたく決心しているので、それでは、ジェミイをおじょうさんのむこにしようとお父さんがいいだし、ジェミイのお母さんをりっぱな馬車でよんできて、すばらしい結こん式をした。

それから、ダブリンの家でみんな一しよにくらして、お父さんがなくなると、ジェミイとおじょうさんと二人がお父さんの財産をゆずられたのであった。



## ジェミイの冒険

底本：「世界の子供」世界文学社  
1949（昭和 24）年 8 月号

入力：匿名

校正：館野浩美

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。